

海賊史観

からみた

世界史の再構築

Pirate's View of the World History
A Reversed Perception of the Order of Things

交易と
情報流通の
現在を
問い直す

稲賀繁美
編

NAIGA Shingami

思文閣出版

序 文——海賊行為とジクソー・パズルの欠けたピース

稲賀 繁美

平成二五（二〇二三）年、「海賊史観」を提唱して、科学研究費助成金（基盤研究A）を獲得した。本書はその成果を公開する報告論文集となる。また本書は、この科学研究費補助金による研究とも連動する国際日本文化研究センターでの共同研究会「二一世紀一〇年代日本の軌道修正」の成果報告も兼ねる。以下、その序文として、研究の方向性と構想について簡略に述べ、本書の意図するところを説明したい。

1. 本研究企画には、大きくみてふたつの方向性がある。一方は、いわゆる「大航海時代」から現在にいたる世界史のここ五百年の問い直しという大きな尺度の問題となる。この方面について、ここ数年間、関連図書の刊行が目白押しであり、「〇〇の世界史」と銘うった著作は三十冊ちかくを容易に数えることができる。「海賊の世界史」もそのひとつだが、「海賊」と銘打った書籍も、同様に急増している。次章の「研究計画および経緯」にも詳説するが、この「海賊」「世界史」両方面で、従来の常識は、大きく塗り替えられようとしている。(1) 本書では 第三部〈「大航海時代」再考——海賊の海の歴史を再訪する〉を中心にこの課題に挑戦する。

2. もう一方には、メタファーとしての「海賊（行為）」piracyの射程の問い直しがある。そもそも、欧米語の

場合、なげもつばら「海賊」であり「山賊」や「馬賊」ではないのか。ここには、海洋制覇によって世界の支配者となった欧州の歴史性が反映しているはずだ。この意味連関からは、海賊版の商品、電子機器から、virtual環境の市民権の主張として「海賊党」という政治結社の活動、その反面としての知的財産権、著作権の綻びと海賊行為との表裏、といった問題系が導かれる。本書では

第一部〈インターネット時代の知的財産と海賊行為〉

第二部〈剽窃・贋作・模造品の遊泳術〉

において、その具体相に肉薄する。

こうした生なましい生態と、第三部で検討する近代世界史再構想との交点において、歴史の実態としての交易における海賊行為、違法行為への問い直しが要請される。それは現今の世界秩序再編成とも密接に連動する。そのため、第三部に続く

第四部〈認知か越境か?——近代国民国家体制の制度的綻びと海賊的侵犯行為と〉

さらに

第五部〈海賊の修辭学——暗喩と交通〉

にわけて、これらの局面に迫りたい。本研究計画関係者が二〇一五年一月にパリ日本文化会館で開催した「うつわとうつし」関連事業でも、こうした視点から新たな問題提起を試みた。²⁾ここで編者は「地学的想像力」を提唱している。詳細は以下に譲るが、それはナオキ・サカイの「地理学的想像力」への代替案でもあった。³⁾

3. 二〇一五年六月の共同研究会では、奇しくも複数の発表者から、ジクソー・パズルの比喩が提起された。ジクソー・パズルにひとつ欠けたピースがあるとする。その欠如したピースの形状は、それを囲む八個のピースの

形状から逆算される。生態系の平衡を説明する比喩として、ジクソー・パズルは有効だ、と福岡伸一は主張している。⁽⁴⁾なぜなら個は自己決定されるものではなく、こうした周囲の環境との関数として、そこに残された欠如を埋めるかたちで顕現するのだから。さらに免疫系における抗原・抗体反応は、胎児から幼少時の形成過程では、自己を「欠如」、「不在」として認識してゆく。なぜなら免疫系にとって「存在」しているものとは、それを攻撃して排除せねばならない「他者」と定義されるからだ。「免疫系にとって、自己とは、今いるあなたから切り抜かれたもの」。これは多田富雄『免疫の意味論』⁽⁵⁾の基本的認識だが、そうすると、免疫系にとっての「自己」とは、実体のネガ、まさに「ジクソー・パズルの欠けたピース」ということになる。それでは成熟した免疫系が目の敵にする海賊的存在とは何なのか。そこで想定される欠如としての「自己」とは何を意味するのか。

日本民藝館の館長に就任した深澤直人も、デザインとは、この最後の欠けたピースを適切に埋める営みだとの認識を示している。言い換えれば、デザインとは免疫系の働きということになる。だが深澤はそれにつづけて、しかしそのジクソー・パズル全体が歪んでいたらどうだろう、との問題を提起する。⁽⁶⁾歪みを助長し、それを規定の事実として容認させてしまうと、世界の矛盾を肯定し、幫助する「犯罪」に加担することになりかねない。

序 文

4. 実はここに、海賊史観を提唱する所以も探られる。ここまでの比喩を逆転させてみよう。ジクソー・パズルの欠けたひとつのピースとは、考え方によつては、パズル全体の歪みゆえに、もはや収まらなくなったピースが弾き出されてきた空隙ではないか。その空虚の場所にはシステム全体の無理が集約され、矛盾が欠如として表現されている。そしてその空隙には、あたかも隙間を目敏く見つけて雑草が繁茂するのにも似て、パズル全体の秩序や規則とは相いれない違法行為が跋扈し、無法地帯が成立する。⁽⁷⁾「海賊史観」が探り当てようとするのは、こうした空白地帯における反秩序の小規模な反乱状態ではなかったか。

それは反乱状態とはいいながら、実際には欠如によって生じたシステムの危機を回避し、緊急避難的に全体の平衡を回復させ、システム全体の致命的な不具合を是正する安全装置でもある。さらにこうした海賊行為は同時に、そこにはシステム全体の矛盾が集約されて発現していることも示す。これは建築家の塚本由晴の「隙間」建築論の志向でもあらう。⁽⁸⁾

実際のマーケティングの現場では、こうした海賊行為そのものが、すでに商業戦略や戦術のなかに組み込まれている。すなわちインターネット上の情報などで、事業主の利害を掘り崩すような海賊商法に対しても、それらを一律に削除したり排除したりはせず、少数の海賊商品はわざと放置し、存続させる。そうした海賊の存在がかえって純正商品の品質保証に役立つ場合もあるからだ。さらにいえば、事業主がひそかに自分の手で「偽」の海賊商品を市場に流し、それに懲罰を加えるような仕事をとることによって、それ以外の「本物」の海賊商品の流通を牽制するといった、虚実入り乱れた事態まで発生している。

5. ここで先にふれた「地学的想像力」が問題となる。地域に流通する商品は、世界市場に上場されるためには、地学的変成を蒙る必要がある。地層の断面にみられる褶曲や断層は、地殻に働いた物理的な力の痕跡であり、そのなかで化学的な変成も発生する。地下のマグマは、こうした過程を経て初めて地表に露頭する。それは精神的な比喩に重ねるならば、精神的な力動性が途中で検閲と整形を経験して昇華される過程にも類比できようか。

ジクソー・パズルは二次元のモデルにとどまっている。それはいわば表層の力関係の比喩としては有効だが、実際には地殻も、それを下から押し上げる大地の流動のうえに乗っている。表面下に隠された動態の結果が、表面の表情を構成する。経済学的に言い替えれば、それは原材料が加工され、製品へと上り詰める筋道でもある。

ユネスコの世界遺産にせよ無形文化遺産にせよ、地域に保存された原型は、遺産登録という「株式の上場」に際

して、必要な条件を満たすための変成を要求される。その要求に耐えられないものは、浮上する以前に抹消される。逆に、従来の市場の穴場に新製品が浮上するが、それは画期的商品として受け入れられる場合もあれば、反対に海賊商品、市場荒らしとして疎外される。

これはまた地域言語を主要言語、世界言語へと翻訳する過程で発生する検閲・編集作業にも当て嵌まる。編集・翻訳過程での検閲は、一種の抗原・抗体反応といつてよい。地域の風土病は世界に伝播する以前に、検疫により拡散を抑止されるが、文化的な事象や流通商品も、似たような文化検疫によって、防疫され、解毒され、安全なものへと変質を遂げて初めて、世界市場に流通する権利を獲得する。この検疫制度の盲点を突き、欠陥に巧みに乗じるのが、海賊商品と呼ばれる非正規商品の流通実態にはかなるまい。⁽⁹⁾

6. ここまでくると西暦二〇〇〇年頃にしきりに話題となった「ガラパゴス化」にもあらたな視野がひらける。

国際基準にはあわない地域特有の商品開発を揶揄した表現だが、それは同時に世界標準とは共約性を欠いた地域文化の特性を擁護する術語でもあった。どちらがよいか悪いかの問題ではない。地域から世界の流通には、途中に障壁があり、それを掻い潜る上昇志向は世界基準という籠に嵌められるし、その拘束を厭うならば「ガラパゴス化」という選択肢が拓ける。そしてこの現象は、翻訳事業一般にも当て嵌まる。それは一方から他方へと、両者あきらかに異質な言語という媒体に合わせて商品を変容させる作業でありながら、翻訳によって運ばれる品物は、翻訳の前後で同質である、という前提で事が遂行される。この品質保証は、少し冷静に考えれば、あきらかな論理矛盾、まやかしてしかありえない。翻訳という越境行為は定義からして海賊商法なのだが、その海賊商法は事後に認可される場合（ノーベル文学賞受賞）もあれば、反対に忌避される場合もある。条約締結などの場合には、翻訳を介した橋渡しという海賊商法に合法性という認可が与えられ、法定翻訳による「跨ぎ」を前提として、

利害調整が成功した場合には、条約が批准される。⁽¹⁰⁾

7. 文化のあいだの架け橋という比喩がよく用いられる。だがこの表現が「類推」*analogie*としては「まやかし」であることは、ジャック・デリダも犀利に説くとおりで。深い淵によって隔てられた両岸を結ぶのが「橋」だが、その両岸の世界が著しく異質であるなら、その両者を結ぶ橋とは、両者を隔てる傷跡であり、両者の懸隔を落差として描く「象徴」にはかなならない。両岸の「橋渡し」とは、両岸におよそ「類推」などなりたない「淵」があることを示しているからである。⁽¹¹⁾ 沖繩の琉球王朝の外交過程を分析して、そこに『翻訳の政治学』の実態を分析したのが与那覇潤の博士論文だった。⁽¹²⁾ 強大な複数の政権との外交交渉には二枚舌あるいは二股膏薬の表裏が不可欠だが、これはデリダ的な用語でいえば *pharmakon*、すなわち薬が同時に毒になるという両義的存在だろう。

条約締結に際して、両者が同一と理解して合意に至った条文が、時効により情報開示されると、見事に食い違っていた、といった事例には事欠かない。だが実際には妥協不可能な事態を、二枚舌の翻訳をも駆使して巧みに架橋するところに、外交交渉の醍醐味もある。言い換えれば「合法化」された「誤訳」と「正確な翻訳」の「非合法化」との表裏の綾にこそ、外交の真実がある。

8. 海賊船の場合も、自分の無国籍性や違法性をたかだかと旗竿に掲揚する筈もない。偽って味方の旗を掲げて接近し、突然海賊旗に改めて略奪を始める場合もあれば、強大な敵を装って応戦を遣り過ごすといった臨機応変が身上であり、身替りの速さ、固定した自己同一性の欠如こそが、海賊たるゆえんであろう。毒か薬か、その懸隔をメビウスの帯の表裏よろしく、変幻自在に乗りこなし、神出鬼没で航行するのが、海賊船の宿命である。

9. ここまでくれば、海賊という「毒」が、世間の常識としての正義に潜む巨悪を暴く「解毒剤」ともなりうる両義的な位置あるいは運動をなす僥倖でもありうるが見えてくるだろう。それは、秩序と反秩序とが入れ替わる臨界点、いわば砂時計の中央のくびれ、上下逆さまのふたつの三角錐が接する交点に出現する現象でもある。一方からみれば縮小であり減衰である運動が、他方からみれば拡大であり増幅となる、一方からみれば不利益が、他方の利益となる。その交錯点に海賊現象が出現する。正義と悪もここで反転する。二枚舌、あるいは二重スパイなどといわれる状況と酷似した、どっちつかずの様相である。

10. いうまでもなかるうが、その海賊行為を善と容認するか悪と断罪するかは、周囲の権力構造次第である。私掠船 corsair は、実際にはイギリスの女王陛下公認の艦船であり、海賊 pirate とよばれたのは、そうした官許なく、無認可のまま、同様の行動を生業とした輩を断罪するための蔑称だった。まさに小さな泥棒は犯罪行為だが、大泥棒とは王侯貴族による公然たる国事行為の謂。合法か違法かは権威 authority と正統性 legitimacy の裏打ちの有無でしかない。危機管理は、とかく白黒を判明にしたがる。だが、この分別の姿勢とは、あくまで体制側の価値観の表明、敵方を異端視し犯罪者として断罪することで、体制は自己の安全を確保する。それは、法的権力行使の別名にほかなるまい。断罪すべき悪を生産することなくしては、権力はみずからの正義を維持することはできない宿命なのだから。

11. こうして、あらためてジクソー・パズルの欠如したピースとは何かが問われることとなる。パズルという秩序平面に穿たれた穴は、まさに穴明き主義即ちアナキズム anarchism の巣窟として、権力側からは唾棄され、そうしたアジトやニッチを「潰す」ことこそが、秩序維持装置たる警察権力の尊い務めとなる。国家の免疫系は、

異分子を敵として殲滅するのが、定義からしてその機能なのだから。しかし穴がまだ少数派の虫食い状態程度ならばよいが、それが次々に増殖し、互いに伝線したりし始めると、どこかで臨界点を迎える。秩序は、秩序たる以上、多数派でなければならず、穴が半分を超えれば、もはやそこに秩序を期待するわけにはゆくまい。海賊行為とは、「公海」という秩序に一時的な風穴を穿ち、秩序の空白地帯やほつれ目を目ざとく探知して、利鞘を稼ぐ巧緻だろう。となると、革命とは、ジクソー・パズルの穴という反秩序が、秩序よりも優勢となり、パズルの結束を維持することがもはや不可能となった段階を指すものだろうか。虫食いが進行して、パズルの図柄が認知不可能となれば、空隙を埋めることで新陳代謝を保障するという、生態系の動的平衡も崩壊する。だがこの臨界を超えた革命状況は、もはや海賊行為の名で呼ぶ段階を超えている。言い換えれば、海賊行為とは、あくまで秩序の綻び目に寄生する害虫 parasite だが、その宿主の生命を脅かすに至っては、もはや海賊としての分を超えた存在へと、変質を遂げていることになる。

12. ここで、見えるべき図柄（＝秩序）と、その背景で本来なら不可視であるべき地（＝隠された反秩序）との関係を考えてい。比喩として人形浄瑠璃の黒子を考えてみよう。舞台上演じられる曲目、そこで演ずる人形たちは自律しているように見えるが、それらは実際には黒子と呼ばれる人形師たちによって操作 manipulate されている。我々とはもすれば、自らを自分の意志によって自律して動く主体だと想定するが、それが錯覚にすぎないことは、合気道家の内田樹も、謡曲での仕舞の体験から語っている。ジクソー・パズルの欠けたピースと同様、為すべき舞を為す位置と間合いが触知されてくるが、そこに穴を残さないように振る舞わなければ舞台は成立しない。それは全体への受け身の迎合でも、身勝手な一人合点でもない。相互依存は必ずしも部分を全体に塗りこめて解消することではない。⁽¹³⁾

さらに厄介なことには、現在の人形浄瑠璃では、人形の主使いは素面を観客にさらす。これに演劇狂のフランス知識人たちは当惑を隠さなかった。一九六〇年代に日本に滞在したロラン・バルトの場合には、日本で観劇に動しんだ先駆者、大正年間の駐日大使にして劇作家、熾烈なるカトリック信者でもあったポール・クロードへの反発もあつたに相違ない。能と謡曲に感嘆したクローデルとは対照的に、無神論者のバルトは、人形浄瑠璃の主使いの顔は、そこになんら読むべき意味などない、という「意味の廃絶」を示すために存在するのだ、という錯綜した理屈を展開した。『表徴の帝国』に見える著名な説である。¹⁴⁾

実際のところ、かつては主使いも黒布で顔を覆っていたとの伝承もある。また民間伝承では、素顔をさらす人形師こそが、観客の女性たちの鼻屑であり、評判記に記載され、美形の主使いを若い女性が追い回す色恋沙汰まで頻発したという。ここで舞台の人形とそれを操る舞台裏との関係は逆転することになる。ひよつとすると、主人公のはずの人形の脇でわざと素顔をみせ、使い手の固有名を演目に表示するという倒錯にこそ、俳優の、そして舞台上演の真実があつたのではないか。さらにまた、見えないことを強烈な黒で強調する黒子の存在と、不在のはずなのにこれ見よがしに素顔を晒す主使いとの落差、その往還に、主従関係の相互依存と倒立、海賊的存在の表裏、言い換えれば、正統性の振幅とそこに骨絡みな両義性を考え直す便よすがを得ることも、できるのではあるまいか。

序 文

舞台の虚構とそれを背後から支える現実との、こうした淫靡な相互依存関係。それが西欧化、近代化のなかで、さらなる違和感を醸しつつも、かえって新たな解釈を招き、助長された可能性をも排除できなくなる。となるとバルトは、西欧の眼差しのもとで暴露された事態にことさら「日本の表徴」を見て、結果として、そこに屋上屋の解釈・合理化を捏造した嫌いもあることになる。近松門左衛門の有名な言葉を借りるなら、これはまさに文化翻訳における虚実皮膜論だろう。文化間の翻訳事業にもまた、海賊行為は頻発する。

13. 學術言語としての英語の場合を考えてみよう。英語を非母語とする多くの人々が、學術論文を英語で執筆する。それは地域の非英語を翻訳し、表面上は英語の語彙が文法にそって綴られている。だが実際には、その表面の下、裏側には、非英語の出発言語の語彙や発想が、滓すじのようになお付着している。英語の語彙として理解されるのとは違った含意 connotation が、母語での解釈において裏読みされている。ホミ・バーバは植民地インドの場合を例に、被植民地側の上層階級が植民者の文化を模倣する態度を「擬態」 mimicry と呼んだ。元来は植物や昆虫などが、生存維持ほかの目的で他種を巧みに装う擬態である。

英語の使用なども、そうした「擬態」による学習の好例である。「民主主義」といったスローガンも、その意味するところは理解する人によって様々で、場合によっては相容れない解釈すら錯綜している。だがそうした水面下の差異は無視して、「民主主義」の貫徹を訴えて選挙民の連帯を勝ち得るところに、政治的言説の「擬態」の効能がある。世界公用語としての英語にも、これに類似した擬態機能が備わっている。そこにはいささか皮肉な事態が発生する。一方ではまさに democracy が好例だろうが、この democracy の名の下で、実際にはおよそ同一とは思えない現実が同一視され、多様で矛盾した選挙民の意思が統合される。その反面、民主主義という言葉は、その内実が肥大しインフレーションinflationを起し、価値低減を蒙っている。

他方では、外来語が英語に取り込まれる。日本語でもツナミ、スシ、ベントウ、カワイイなどの語彙が英語辞典に登録される。だが登録と同時にそれが変質を蒙るのは、california roll をみるだけでも領けよう。ここまできると、もはや本物も擬態も区別がつかない。これを要するに、ひとつの語彙が世界流通貨幣となることは、それ自体、海賊的な擬態であり、母語での元来の意味作用からの乖離と裏腹である。mimicry 理論提唱者である Homi Bhabha 自身が、いまや英語圏学会の「行動規範」 behavior model として「擬態」 mimicry の対象に成り代わった様をみても、思い半ばに過ぎよう。

14. もはや正統性や擬態をめぐる言説分析など問題ではない。それが筆者の「海賊史観」による「文化翻訳分析」にたいするガヤトリ・スピヴァックの簡明な評釈だった。⁽¹⁵⁾ 黒子があるとき頭巾を脱いで素顔をさらす。それは無名だった非西欧の第三世界出身の知識人が、西欧社会のスターへと脱皮して実名で世を渡ることと同義だったのだろうか。だが素顔を晒した彼らは、はたして植民者の擬態を演じているのか、それとも植民者の文化を篡奪したのか。はたまた西欧の流儀で演じられていたはずの舞台が、実際には文化圏を異にする黒子の人形使いたちによって、そうとは知られぬうちに、異質なものへと変貌を遂げてゆくのが、脱植民地状況と呼ばれる今日、すくなくともかつての帝都における、文化状況だったのか。

15. 第二次世界大戦後、ヤルタ体制とも呼ばれた世界秩序が、一九八九年の冷戦の崩壊からすでに四半世紀を経過し、もはや過去の遺物へと転落しようとしている今日、世界基準の正統性もまた喪失の危機に瀕している。

Hegemonyを「覇権」と訳すのは誤訳だろうが、empireが「天下」と類比されるなど、英語と中国語とのあいだで発生している言語的「覇権争奪」も、全球化 globalization という幻想の現実を端的に示している。⁽¹⁶⁾ 超大国の失墜、世界の保安官の喪失とともに、代替の hegemony も覇権も確立されない今の世界は、「正義」の擬態に溢れ、一時的かつ広範なる海賊の跳梁跋扈状況とも揶揄できよう。实体经济とはおよそ無関係な金融が世界を支配し、インターネットの普及が、従来の金融決済や商品流通における関税障壁や文化的国境の檢疫装置を、すくなくとも仮想空間での情報交換においては、事実上打破している。そして電腦たちが、もはや人類による制御をも凌駕し、それら自体が社会秩序にたいする、水面下の不可視の海賊と化している。黒子だったはずの電子機器が、チェスでも将棋でも囲碁でも人間の知性を圧倒し、さらにふと気が付くと主従立場を替え、人類を支配する胴元に成り代わる日も、遠くないかもしれないのである。

16. 精神医学の用語を用いるなら「筒抜け状態」(長井真理)とも形容すべき、こうした世界的な海賊状況の多面的な昂進に直面して、いかなる方策が模索できるのだろうか。もはや明らかのように、従来の地理学的な想像力、国民国家体制の尺度による統治感覚に基づいて、海賊行為を一方的に違法行為として摘発し、処罰するだけの硬直化した対処療法では、総崩れの兆候を見せ始めているジクソー・パズルの修復は期待できない。むしろ、現時点でそれと視認できる「欠けたピース」に注目し、「海賊行為」の温床ともなる、それらの欠落点にいかなる葛藤が集約されているのか、その矛盾の結節点を腑分けして、そこに全体の歪みの力学がどのように錯綜しているのかを、地道に点検する作業が必要なのではあるまいか。それは容易に特効薬のような処方箋を提供できる性質の課題ではない。むしろそうした万能特効薬のような解決策を性急に求めて、秩序に支配された「公海」*High sea*の安全回復を期待するような普遍的世界観が、現状の虫食い状態を招来した原因ではなかったか。

あちこちに穴の開いたジクソー・パズルという様相を呈した世界地図。虫食い状態で穴を晒している、「欠けたピース」。ソマリア沖海賊なども、そうした、現代世界にほっかりと空いた「穴」、欠損したピースの典型例だろう。自らがその陥没の穴へと落ち込む危険をも冒しつつ、その欠落の動態に迫る研究が、「海賊史観」の、不可欠の出発点となるだろう。欠けたピースによる穴、というと、あるいは静態的な印象を与えるかもしれない。だがその現場に踏み込んでみれば、そこはむしろエドガー・アラン・ポーの「大渦巻」が描いたような、潮流の合流点に発生する螺旋状の渦なのかもしれない。従来の惰性の既成秩序にそった進路を変更し、その渦あるいは逆巻く淵 *abyme* = *abyrne* (無限後退の入れ子紋章) の探求にむけて、我々が海賊船の行路を定めるべき時期を迎えているのではないだろうか。⁽¹⁷⁾

本書がそうした問題意識を孕む無秩序な大海原へと航路を向けるための指針となり、海図なき航海への誘いと

なれば、編者としての企みは、半ば成就されたものといつてよい。たしかに、世界なるものを、安全な航路を示す海図へと整序するべく、先人たちは多大な努力を払ってきた。だが地球表層を覆い尽くしたはずの海図は、いまや至る所で欠陥を露呈し、役立たずな遺物へと、急速な劣化を遂げている。出来合いの海図の裏を搔く現実が、至る所で我々を待ち構えている。本書は、見えざる暗礁を縫いつつ、定かならぬ目的地を探りつつ操舵する覚悟を育むための試論となることを望む。だが水先案内を自負しようにも、既存の知識はもはや役に立たない。本書もまた将来のための捨て石、先行するがゆえに座礁した沈没船となる運命を免れまい。爾後の航路標識に、避けて通るべき難所の汚名とともに刻まれる以上の存在ではありえまい。あるいはホメーロスの『オデュッセイア』に登場するセイレーンのように、それは岩礁へと変身を遂げたのちにも、残る人類に警鐘を鳴らしつづける幻のような歌声として残るだろうか（本書カバー絵参照）。それが災厄を回避するのに有益な目印となるか、それともかえって船乗りたちを誘惑して難破を招く躰きとなるかは、本書の読者のご判断に委ねられることとなる。

冒頭にも触れたとおり、本書は、国際日本文化研究センター共同研究「二一世紀一〇年代日本の軌道修正」二〇一三―二〇一五年度の成果報告論文集である。また本書に掲載したいくつかの論文は科学研究費補助金（基盤A）25244011、平成二五―二七年度「海賊史観から交易を検討する…国際法と密貿易―海賊商品流通の学際的・文明的的研究」による調査・研究成果の一部をなす。なお末尾ながら、本企画の出版に前向きに取り組んで頂いた思文閣出版新刊事業部の原宏一氏、面倒な原稿の編集に携わっていただいた井上理恵子氏に、この場を借りて深謝申し上げます。

(1) 稲賀繁美「交易の海賊史観にむけて…美術品交易を中心にして」(徐興慶編『日本学研究叢書8：近代東アジアの

ポリア』国立台湾大学出版中心、二〇一四年一月、一三三〜一五二頁）。許可を得て、本書に再掲する。また、本件については、川勝平太・静岡県知事はじめとする識者とも意見交換の機会をもった。ちなみに「海賊史観」は川勝「海洋史観」を水面下から補填するパロディの構想であり、著名な経済史家である川勝氏の賛意を得ており、また東南アジアを含めた交易史の専門家、濱下武志氏とも意見を交換している。

- (2) Exposition: *Réceptacle du passage ou La Vie transitoire des formes et ses empreintes*, Colloque international: *Bercem du temps, Passage des âmes*, Maison de la culture du Japon à Paris, France, 20-24 janvier, 2015.
- (3) 稲賀繁美「地理学的想像力から地学的想像力へ：酒井直樹氏の講演「翻訳と地図作製術的想像力」を聴いて」（『図書新聞』二八七九号、二〇〇八年七月二六日）。
- (4) 福岡伸一「無くしたピースの請求法に感心」（『芸術と科学のあいだ』二〇一四年一月二四日、日曜版）。および同「免疫系では自己は空虚な欠落」二〇一四年二月二日。『芸術と科学のあいだ』（木楽舎、二〇一五年）に所収。
- (5) 多田富雄『免疫の意味論』（青土社、一九九三年）。
- (6) 深澤直人「新館長と語り合う会」日本民藝館、二〇一三年一月一九日（鞍田崇報告より）。
- (7) デンニツァ・ガブラコヴァ『雑草の夢——近代日本における「故郷」と「希望」』（世織書房、二〇一二年）。
- (8) 塚本由晴 / Tsukamoto Yoshiharu, *Niche / 隙間* 10 + 1 No. 30 (都市プロジェクト・スタディ) 一三〜一八頁。
- (9) 稲賀繁美「翻訳の政治学と全球化への抵抗」(『絵画の臨界』名古屋大学出版会、二〇一三年、序章)。
- (10) 稲賀繁美「非母語という類似餌(ルアー)には何が掛かるか」(郭南燕編『バイリンガルな日本語文学・多言語多文化のあいだ』三元社、二〇一三年六月二〇日、二二〜四六頁)。
- (11) Jacques Derrida, *La Vérité dans la peinture*, Flammarion, 1978, p.43. 『絵画における真理』（高橋允昭・阿部宏慈訳、法政大学出版局、一九九七年、五八〜五九頁）。
- (12) 与那覇潤『翻訳の政治学』（岩波書店、二〇〇九年）。
- (13) 内田樹「伝統文化に宿るもの」(小林昌廣との対談『継ぐこと・伝えること』京都芸術センター、二〇一四年、八八〜九〇頁)。

- (14) Roland Barthes, *L'Empire des signes*, Skira, 1970, p.81.
- (15) 稲賀繁美「翻訳の政治学と全球化への抵抗：覇権志向から脱却した「海賊」史観による美術史をめざして」第28回京都賞記念ワークショップ思想・芸術部門『翻訳という営みと言葉のあいだ』21世紀世界における人文学の可能性』国立京都国際会館、二〇一二年一月二二日。改稿和訳は稲賀『絵画の臨界』（名古屋大学出版会、二〇一三年）序章に収録。
- (16) Hegemonyと覇権の違いについては、白石隆『海の帝国——アジアをどう考えるか』（中央公論新社、二〇〇〇年）。
- (17) 本稿は、稲賀を研究代表者とする、国際日本文化研究センター共同研究班「二一世紀一〇年代日本文化の軌道修正……過去の検証と将来への提言」（平成二五年度—二七年度）の成果論文集取りまとめのための呼び掛け、寄稿者への誘い水として、二〇一五年六月に執筆した。その一部は改変のうえ、稲賀繁美『接触造形論』（名古屋大学出版会、二〇一六年）第Ⅱ部第一章第四節に、やや異文を伴ったかたちでも収録されていることをお断りする。

目次

- 序文——海賊行為とジグソー・パズルの欠けたピース 稲賀繁美 i
研究計画および経緯 稲賀繁美 3

第I部 インターネット時代の知的財産権と海賊行為

- ネットの海は無法か——インターネットにおける〈海賊行為〉について 多田伊織 17
〈ひろゆき〉とは何だったのか——「2ちゃんねる」からも「ニコニコ動画」からも離れて 鈴木洋仁 49
マンガ翻訳の海賊たち——スキャンレーションにおける航海術をめぐって 片岡真伊 70
反海賊版協定はなぜ破れたか 山田奨治 91
- コラム** 経営者・川上量生のビジネス書を読む
——「説明できない」ニコニコ動画を「誰もやっていない」ビジネスチャンスに変える術 鈴木洋仁 107
- コラム** デジタル時代の複製 新井菜穂子 118
- コラム** シンギュラリティーより愛をこめて 森 洋久 132

第II部 剽窃・贋作・模造品の遊泳術

- 「永仁の壺」と昭和の陶芸史——ニセモノから芸術史を再考する試み 藤原貞朗 147
捏造された人魚——イカサマ商売とその源泉をさぐる 山中由里子 170
前衛としての生き残り——工藤哲巳の海賊的考察にむけて 近藤貴子 196
シミュレーション・ニズムと日本——あるいは日本現代美術における海賊行為の可能性と限界 平芳幸浩 227

展望の《仮山石》について——中国現代彫刻における「仮（偽る）」という戦略 呉孟晋 246

コラム 一八八八年バルセロナ万国博覧会における日本美術品の違法販売について

——新史料発掘と紹介 リカル・ブル・トゥルイ 275

コラム 画家・藤田嗣治の「著作権」興亡史をたどる——没後五〇年に向けてのノート 林 洋子 283

コラム 機略に満ち溢れたインフォーマル経済——タンザニアの模造品交易を事例に 小川さやか 296

第三部 「大航海時代」再考——海賊の海の歴史を再訪する

海賊史観からみた世界交易史・試論 稲賀繁美 309

人類の敵——グロテイクスにおける海賊と航行・通商の自由 山内 進 334

略奪品か戦利品か——一六一五年のサント・アントニオ号拿捕事件と幕府の対応 フレデリック・クレインス 365

悪石島の寄船大明神とその周辺 榎本 涉 395

コラム 一六世紀宣教師記録に見る海賊 滝澤修身 416

コラム タイと「海賊」 平松秀樹 431

コラム 広州十三行 劉建輝 443

第四部 認知か越境か？——近代国民国家体制の制度的綻びと海賊的侵犯行為と

植民地美術行政における海賊的境界侵犯——インドシナ美術学校とベトナム画家の「怪帆の術」 二村淳子 453

アントニン・レーモンドとル・コルビュジエ、建築における海賊行為

——形式ではなく精神性が与えた影響についての考察 ヘレナ・チャプコヴァー 487

目次
フランスにおける「任意の地区評議会」——海賊党の液体民主主義と近年の民主主義運用のふたつの動向から 江口久美 505

- コラム ユーゴスラビア内戦と「法」——ものうり人の情景 山崎佳代子 530
- コラム 一九〇〇年、パリ——模造された大韓帝国 李 建志 544
- コラム 越境的あるいは海賊的——「タートルの木」をめぐる 今泉宜子 554
- コラム 京都における人と野良猫の関係史 春藤献一 569

第V部 海賊の修辞学——暗喩と文通

- 修辞学における西洋と日本と中国——その受容と変容をめぐって テレングト・アイトル 583
- “Immature poets imitate; mature poets steal”——テキストの／における〈海賊行為〉にかんする予備的考察 三原芳秋 620
- 二一世紀に海賊化した「邦楽」——宮城道雄による邦楽器の改良と新しい楽曲制作でみる〈海賊活動〉 申 昌浩 681
- 「民主主義」を抱きしめて——石坂洋次郎映画はいかにして「民主主義」を戦後日本社会に受容させるに至ったか 千葉 慶 706
- コラム 海賊たちが帰る場所
- 彼は更に七日待って、鳩を放した。鳩はもはやノアのもとに帰って来なかった。(『創世記』八、十二) 大橋良介 735
- コラム 殿様と熊とアイヌ文様——芸術／工芸／おみやげにおけるデザイン流用 中村和恵 747
- コラム アラブ演劇の(非)流通から〈世界文学〉を踏み外す 鵜戸 聡 761
- コラム 「公的研究費の不正使用に関するコンプライアンス研修会」を誉め讃える 稲賀繁美 776

航海日誌抄録——海賊商品流通の学際的・文明的的研究で行った3つの美術展 大西宏志 787

あとがき——あらたな海賊学の船出にむけて 稲賀繁美

809

共同研究会開催一覧 (xi) / 人名索引 (vi) / 執筆者紹介 (i)

あとがき——あらたな海賊学の船出にむけて

「海賊行為」を無規定なまま「船出」した理由

本論集では、「海賊行為」を頭ごなしに定義あるいは規定することなく、それに類すると論者が想定する事態をもちより、そこからあらためて、世に言う「海賊行為」とは何なのか、なぜそうした事態が発生し、また容易には撃退できないのかに、思索をめぐらせることとした。一方で、「海賊行為」＝「違法行為」＝「反社会行為」＝「社会の敵」といった連想に無批判に乗じることは慎んでいる。海賊を主人公とするハリウッド映画の人気ひとつをみても、世人が頭ごなしに「海賊」を悪とは認識していないことが窺われる。むしろ世間の柵しがらみに縛られた常人たちにとって、そこから脱する自由を享受した辺境人としての「海賊」とは、自らの実現できない夢、公言できない本音を委ねる存在だったことも想像に難くない。人々は「海賊」という「自由人」にいかなる夢を託したのか。

また同時に、そもそも「悪」を退治し根絶することで社会正義が達成できるのか、「悪」の存在しない「理想社会」こそ、恐怖政治、正義と秩序という名の法による支配が貫徹された、窒息しかねないデストピアではないのか、という本能的な危惧もひとびとの脳裏からは去らない。たとえそれが娯楽番組の提供する代替幻想にすぎなくても、「海賊」がアンチ・ヒーローでも、プロレスの「悪役ビョウ」でもなく、むしろ密かに期待される「隠れた聖者」、ゴロツキを装った善人、あるいは社会制度の矛盾の結節点として、心ならずも司法や行政から誅殺される犠牲者の代表、といった「肯定的」な人格を獲得することにもなる。ここにはいかなる表裏の綾が隠されているのか。それも「海賊研究」の課題であろう。

他方、だからといって無条件、手放しの「海賊」賞賛を提唱することも、本論集の目的ではない。論じられる対象となった歴史上の人物、あるいは現存する方々から、「自分を海賊呼ばわりするとは何事か」とご批判を頂戴しかねない。「海賊」即「社会から抹殺すべき悪」ではない、との前提はあくまで確認したうえで、それでは本書が扱おうとしている「海賊」あるいは「海賊行為」とはいかなる性質の事柄なのかを、ここで確認しておきたい。

違法と脱法と

近年「脱法」という言葉が流行をみている。「脱法ハープ」などが震源のひとつだろうか。法律で規定される違法行為には当て嵌らないらしいのだが、警察権力による「摘発」、ではないにせよ「要観察」、必要に応じては「取り締まり」や強制捜査の対象となるようだ。報道機関などの扱いを見る限り、「秘密結社」めいた地下組織への潜入レポートでなければ、反社会的な犯罪予備軍として指弾する姿勢は明らかだろう。麻薬の蔓延がきわめて危険であり、禁断症状がまねく心神喪失にともなう殺傷沙汰や、密輸・密売が容易に犯罪の温床となり、社会の安寧を揺り崩す危機を招くことは、いまさら確認しておくまでもない。

とはいえ、いかなる薬物を違法と指定するかは、けっして自動的には決定できず、時代や社会状況に応じて、判断も左右される。ミャンマーなどではケシはもともと薬物であり、乳幼児が風邪をひいた場合など、これを少量調合することで、適切な薬効を発揮していた。阿片への精製（モルヒネ）や麻薬（ヘロイン）としての使用が大きな社会問題を惹き起こし、密輸出が軍閥や（旧）植民地権力によって悪用されるに及び、「麻薬戦争」が勃発した。事態がここまで発展すると、その根絶はもはや不可能となる。だがブラジルのアマゾンにあっても、何が違法な麻薬で、何が原住民の宗教儀礼などで公認された葉草なのかの区別は、医学的、薬物学的には裁断不可

能であり、その決定はあくまで政治的かつ恣意的で強引な線引きに他ならない。

ここで「脱法」に戻るならば、法律用語としてきわめて曖昧な事態が進行していることは、疑いあるまい。社会的良識としては「違法」以上に悪質であるかのような含意が流通する。その一方、厳密に法律的にみれば、銘柄指定から漏れた薬草の栽培や流通をおしなべて「違法」とはできないという事情が、「脱法」という術語の背景にはあるはずだ。言い換えれば、「脱法」とは、「合法」と「違法」との狭間の「灰色圏」gray zoneを指す言葉だが、そうした灰色領域は、それだけにかえって社会的な注目を浴び、その領域で発生した猟奇事件や悪質犯罪が誇張して特筆大書されがちだ。より正確にいえば、「脱法」とは、「法」という枠組みの有効性そのものを「脱」した世界である。だからこそ、白黒が分らない。有罪とも無罪とも判定不能な「規則外」世界である。コトの性質上「灰色案件」であるため、厳密にその範囲を囲いこむことそのものが無理な相談だが、本書で扱う優先候補となるのが、こうしたいわゆる「脱法」の不確かなる「灰色領域」とかなりの程度重なりうることは、了解いただけるのではあるまいか。序文でみた「ジクソー・パズル」の欠けたピースという比喩を思い起こしたい。欠けたピースをきちんと嵌めることで、社会秩序が回復できるとは限らない。なぜそのピースが嵌らなくなり、脱落したのか。そこまで追跡しないと、かえって既存秩序の裡に密かに孕まれ、腐乱していた問題点を抽出することには繋がるまい。

「脱法」とは現時点での法律体系の規制からは「脱して」いる。そのかぎりでは「違法行為」以前だが、それだけに、社会秩序の維持をめざす「官憲」側からすれば、よからぬことを密かに企んでいるに違いない族と映る。犯罪の芽は未然に摘み取らねばならぬ。だから要監視の対象となる。だが当事者側からみれば、「違法行為」でもないのに、あらぬ嫌疑を受け、社会的に指弾されるのは、迷惑千万。単なる新商売なのに、それを既存の枠に収まらないというだけの理由で一方的に禁じられるのは、理不尽だ。より良い社会を実現するための試金石なの

に、それを罰則もないのに犯罪視することのほうが、職権濫用である。それこそ、権力の名を騙った「反社会的行為」だ、と反論することにもなるだろう。

ここまで言えば、読者には、マスコミを賑わせた様々な事件が脳裏に去来することだろう。そこには予断からする誤認逮捕や、マスコミが誘導した「正義観」が暴走して、無実の人間の一生を破滅に巻き込むケースもあつた。ここには様々な問題が輻輳している。そのすべてを再検討することは、到底紙幅が許さないが、典型例の点検は不可欠だろう。

海図のない航海と、合法・非合法の彼岸

ここから導かれるいくつかの論点を列挙しておこう。

①まず、既成秩序はその基準では判断できない新規な現象に対しては、いわば制度の自己保存本能から、直観的に警戒する。制御不能となることへの言い知れぬ不安が兆すからだ。金融取引、通信など、従来の商取引、無線法や公共放映権では律しきれない事由が、電子媒体の飛躍的な発達とともに、無数に登場する。しかも新規な技術開発は、従来の法律的な網では制御できない。こうした場合、えてして既成権力は、従来の法律体系にそつた些末な違反行為や別件逮捕、司法取引といった、いわば強引な手法によって、これらを犯罪処理の論理に乗せようとする。摘発の直接の実行部隊となる官吏には、直情径行な正義漢、四角四面で小心翼翼たる生真面目な規則遵守主義者の皆様が、いまでも熾烈な現場を支えておられるのだろうか。伊丹十三の『マルサの女』（一九八七）などに言及すると、それだけでトシガバレルかもしれないが、あのコミカルな国税局査察部の仕事ぶりが、なにやら牧歌的に懐かしく思い出される。

②またマスコミは、場合によっては時の為政者や支配政党の方針を汲み、「長いものに巻かれろ」の迎合姿勢を

とり、また昨今ではとみに減退したとはいえ、反対にそうした既存秩序に叛旗を翻し、権力奪還の意図のもとに、輿論あるいは世論を誘導したりもする。自らの意見が、あたかも社会の大勢を代表する「空気」であるかのごとくに演出するのが、その性癖であり、ここで「脱法」などの「灰色圏」は、それこそ「ネズミ小僧」よろしく、義賊扱いされて賞賛されれば、ついに「お縄」となって処刑されたりすれば、密かな同情は漏らしつつも、社会的制裁を是とする世論形成に貢献したりもするだろう。

③だが三番目として、ここで従来のような権力対反権力の図式がもはや有効ではないことに注意すべきだろう。特定の宗教団体にたいする体制側の弾圧や、「国際社会」を任じる権力による軍事的制圧も、けっして過去の物語となったわけではない。だがこれらは、いわば旧来の図式の範囲内で理解できる事例、あるいは新規な事例を旧来の枠組みに取り込んで処理しようとしている姿勢の現れだろう。現時のマスコミによる世界ネットワークは、報道すべき事件の認定やその扱い自体が硬直化しており、決定的に時代遅れとなっている。

④むしろ注目すべきは、旧来の枠組みでは処理できない案件が膨大に発生しながら、それへの対応が追いつかない、あるいは原理として追いつき得ない事例が発生しているのに、新規の対処方法が開発されないまま、という状況である。本書が、無理や無茶を承知で、あえて「海賊」という枠を「濫用」しつつ、浮かび上がらせようと腐心しているのが、この領分、定義からして境界画定もできない、この厄介な「灰色圏」である。

ホリエモンの場合には、新規金融業の発案が、ご自身の成金志向に煽られた兆候があり、それにたいする世間のやっかみ、嫉妬心も相乗して、検察側の追求を有利にした状況が見て取れよう。脱税容疑で攻めれば立件可能だったからだ。だが例えば「2ちゃんねる」や「ニコニコ動画」の西村博之の場合、既存の複製権や電波行政の法律体系では規制不可能な事業展開には、当時の日本国内インフラでは対応できず、結果的に国外の情報資源に

依存した事業展開をしたところ、これが脱税や著作権法侵害などの嫌疑を受けた事例といえるだろうか。一方からみれば納税義務などといった、法律による規制の「網を掻い潜る」知能犯と見られる被疑者が、実際には「ジクソー・パズル」のピースの欠けた空隙に気づき、穴埋めピースを提案して遊んで見せたというのが、真相に近いだろう。「儲け」に無関心な「愉快犯」を「脱税」容疑で追跡すること自体に、制度の硬直と疲労が露呈する。

ウイニー提唱者の金子勇の場合、事後的には刑事犯容疑は晴れたものの、その直後に本人は若くして病死するという悲惨な結末を迎えた。既存の法律環境や規制の枠を超えた技術開発提唱者が、その結果偶発した事態について刑事責任を問われるという事態に、他律的な「海賊的」な状況をみたい。一方で、市民の人権を保護してくれるはずの法律が、それとは逆の制裁作用を越権して発動してしまうような環境が出来たからであり、他方は、この事件が結果的には刑事的に無罪になったとしても、それで技術革新にもなう「海賊状況」の予測不能な発生という事態には、なんら有効な方策を取り得ないという限界が露呈したからである。

もとより本書が提起したいのは、こうした「法律的判決」の是非ではない。法律家の指針となるような判断基準を示そうというのでも、ましてや法廷戦術の指南に及ぼうというわけでもない。それ以前あるいはその先の地点に、現行の司法制度の臨界、綻び目が露呈する場所、既存の善悪判断という「公海」の案件処理では対処できない「灰色」の海がある。こうした「海賊」的水域に注目する姿勢が必要ではなからうか。それは正義漢を気取ることでもなければ、悪役として居直ることでもない。なぜならごく平凡な一市民が、いつどこで犯罪者扱いされるかも分からない「灰色空間」に我々は棲息しているのだから。

平成二十七年八月二八日―平成二十九年一月一三日

編者 稲賀 繁美

U

宇戸清治 Udo Seiji(1949-) 766

V

ヴァレリー、ポール Paul Valéry(1871-1945)
646

ヴェガ、カルロス Carlos Alba Vega 299
ベルニユ、ジャン＝フィリップ Jean-Philippe
Vergne(1983-) 296

ヴァイナー、ジェイコブ Jacob Viner(1892-1970)
355, 356, 357

ヴ・カオ・ダン Vũ Cao Đàm(1908-2000) 460,
467

W

王国維 Wáng Guówéi(1877-1927) 601

王直 Wáng Zhí /Ou Choku(?-1560) 418,
425-427

ヴァールブルク、アビ Abi Warburg(1866-1929)
321

渡邊淳司 Watanabe Junji(1976-) 792

ウィン、リオワーリン Win Liaowarin(1956-)
433

フランク・ロイド・ライト Frank Lloyd Wright
(1867-1959) 497, 498, 501

X

徐冰 Xú Bīng(1955-) 247, 261

Y

山田長政 Yamada Nagamasa(1590?-1630) 432-
434

山口瞳 Yamaguchi Hitomi(1926-1995) 563

山本豊津 Yamamoto Hozu(1948-) 787, 794

山本一郎 Yamamoto Ichirō(1973-) 55, 62-64

山本一太 Yamamoto Ichita(1958-) 102, 103

山本麻友美 Yamamoto Mayumi 799

ユン、プラブダー Prabda Yoon(1973-) 767

吉田晴風 Yoshida Seifū(1891-1950) 693, 699

于凡 Yú Fán(1966-) 250

Z

ゼルナー、アンリ Henri Thomas Zerner(1939-)
206

展望 Zhǎn Wàng(1962-) 246-251, 253-268

張大力 Zhāng Dàlì(1963-) 263

張健君 Zhāng Jiàn jūn(1955-) 261

鄭成功 Zhèng Chéng gōng /Tei Seikō(1624-1662)
425, 427

鄭芝竜 Zhèng Zhī lóng /Tei Shiryū(1604-1661)
425-427

ジマーマン、フィル Philip R. Zimmermann
Jr.(1954-) 132

Pramoj) (1911-1985) 438

Q

クインティリアヌス Quintillian (35-100) 608

R

ラッフルズ、トマス Thomas S. Raffles (1781-1826) 315

レーモンド、アントニン Antonin Raymond (1888-1976) 487, 489, 490, 493-501

リベイロ、グスタヴォ Gustavo Lins Ribeiro (1953-) 299

ロドリゲス、ティブルシオ Tiburcio Rodriguez 276

ルビエル、リュイス Lluis Rouviere (1840-1904) 279, 280

S

サファ、アイナン Ainan Safa (1898-1984) 561, 562, 564-566

斎藤耕一 Saitō Kōichi (1929-2009) 727

坂部恵 Sakabe Megumi (1936-2009) 631

佐藤公治 Satō Kōji (1959-) 103

佐藤進三 Satō Shinzō (1900-1968) 160

榎木野衣 Sawaragi Noi (1962-) 227, 230-237, 239, 240, 242, 243, 261

シェリング、フリードリヒ Friedrich W. J. von Schelling (1775-1854) 741

シラー、フリードリヒ・フォン Friedrich von Schiller (1759-1805) 602

シュライアマハー、フリードリヒ Friedrich D. Schleiermacher (1768-1834) 500

シュミット、カール Carl Schmitt (1888-1985) 344, 345

ショーペンハウアー、アルトゥル Arthur Schopenhauer (1788-1860) 602

シャノン、クロード Claude Elwood Shannon (1916-2001) 125

浅沢栄一 Shibusawa Eiichi (1840-1931) 111

鳥村抱月、瀧太郎 Shimamura Hōgetsu, Takitarō (1871-1918) 593

島崎藤村 Shimazaki Tōson (1872-1943) 595

鳥津忠国 Shimazu Tadakuni (1403-1470) 399

島津義久 Shimazu Yoshihisa (1533-1611) 412

申叔舟 Shin Shukushū (1417-1475) 401

白石一郎 Shiraiishi Ichirō (1931-2004) 431, 432

証如 Shōnyo (1516-1554) 398

司徒杰 Situ Jie (1920-2005) 248

ソクラテス Socrates (471 B.C.-399 B.C.) 607, 614

ソントム王 Songtham (1591?-1628) 432

スペックス、ジャック Jacques Specx (1585-?) 367, 368, 370, 376, 377, 379-386

スペンサー、ハーバード Herbert Spencer (1820-1903) 593

ストール、クリフォード Clifford Paul Stoll (1950-) 133

隋建国 Sui Jianguó (1956-) 250, 262

孫原 Sūn Yúan (1972-) 251

T

高田早苗 Takata Sanae (1860-1938) 590

武島又次郎 Takeshima Matajirō (1872-1967) 592

田中良和 Tanaka Yoshikazu (1977-) 51

種子島時長 Tanegashima Tokinaga (1401-1436) 399

田岡嶺雲、佐代治 Taoka Reibun, Sayoji (1870-1912) 602

タルデュー、ヴィクトール Victor Tardieu (1870-1937) 453, 457-460, 462, 465, 468

田坂具隆 Tasaka Tomotaka (1902-1974) 724

ト・ゴック・ヴァン Tô Ngọc Vân (1906-1954) 460

徳川秀忠 Tokugawa Hidetada (1579-1632) 387, 388

徳川家康 Tokugawa Ieyasu (1543-1616) 368, 371, 373, 374, 378-381, 383-388, 434

徳川義親 Tokugawa Yoshichika (1886-1976) 747, 748, 751, 752, 755, 757, 758

頭山満 Tōyama Mitsuru (1855-1944) 560, 561

坪内逍遙 Tsubouchi Shōyō (1859-1935) 592

津田大介 Tsuda Daisuke (1973-) 51

辻井喬／堤清二 Tsujii Takashi/Tsusumi Seiji (1927-2013) 111

メーソン、ルーサー・ホワイトティング Luther
Whiting Mason(1818-1896) 684
マシューズ、ゴードン Gordon Mathews(1955-)
299, 303
松浦隆信 Matsura Takenobu(1591-1637) 368,
376-380, 385, 387
松下幸之助 Matsushita Kōnosuke(1894-1989)
111
マクルーハン、マーシャル Herbert Marshall
McLuhan(1911-1980) 126
メルヴィル、ハーマン Herman Melville(1819-
1891) 434
メンカリーニ、ファン Juan Mencarini(1860-
1939) 276, 277
メルロ＝ポンティ、モーリス Maurice Merleau-
Ponty(1908-1961) 625
三上次男 Mikami Tsugio(1907-1987) 160
三木谷浩史 Mikitani Hiroshi(1963-) 52
ミムレル伯爵 Comte de Mimerel(1786-1871)
547
閔泳瓚 Min Yonchan(1874-1948) 547
閔泳煥 Min Yonfan(1861-1905) 547
ミンスキー、マービン Marvin Minsky(1927-
2016) 136
森鷗外 Mori Ōgai(1862-1922) 595
森永さよ Morinaga Sayo 792
森岡健二 Morioka Kenji(1917-2008) 596
村上世彰 Murakami Yoshiaki(1959-) 52
村越祐民 Murakoshi Hirotami(1974-) 104

N

中村正直 Nakamura Masanao(1832-1891) 110
ナレスワン大王 Naresuan(1555-1605)
431-433
成田亨 Narita Tōru(1929-2002) 236
夏目漱石 Natsume Sōseki(1867-1916) 595
ネスフィールド、ジョン・コリンソン John
Collinson Nesfield(1836-1919) 604
ニューワース、ロバート Robert Neuwirth 297
グエン・ナム・ソン Nguyễn Nam Sơn(1899-
1973) 468
グエン・ファン・チャン Nguyễn Phan Chánh
(1892-1984) 473

ニーチェ、フリードリヒ Friedrich Nietzsche
(1844-1900) 602
西周 Nishi Amane(1829-1897) 584
西河克己 Nishikawa Katsumi(1918-2010) 723,
725, 726
西村博之 Nishimura Hiroyuki(1976-) 49-52,
54-66, 813
野田佳彦 Noda Yoshihiko(1957-) 104

O

往阿弥陀仏 Ōamidabutsu 397
大庭秀雄 Ōba Hideo(1910-1997) 719
小田切春江 Odagiri Shunkō(1810-1888) 179
大船真言 Ōfune Makoto(1977-) 794, 795, 797,
799, 800, 803, 804
小川有季 Ogawa Arisue 412
小熊慎司 Oguma Shinji(1968-) 103
大泉博子 Ōizumi Hiroko(1950-) 104
岡部嶺男 Okabe Mineo(1919-1990) 149
岡倉覚三、天心 Okakura Kakuzō, TenShin
(1863-1913) 266, 317, 684
岡本光博 Okamoto Mitsuhiro(1968-) 309, 789,
790, 795, 799-801, 803, 804
大越成徳 Ōkoshi Narinori(1854-1923) 275,
279, 280
大前研一 Ōmae Ken'ichi(1943-) 111
オーウェル、ジョージ George Orwell(1903-)
768
大塚琢造 Otsuka Takuzo(1850-1914) 280
大槻玄沢 Ōtsuki Gentaku(1757-1827) 179
尾崎紅葉 Ozaki Kōyō(1868-1903) 595
尾崎行雄 Ozaki Yukio(1858-1954) 587

P

パウロ Paul(-65?) 141, 143
ポール、エリオット Elliot Harold Paul(1891-
1958) 645
彭禹 Péng Yǔ(1973-) 251
ペリー Matthew Calbraith Perry(1794-1858)
187, 188, 681
プラトン Plato(427 B.C.-347 B.C.) 614
ポーロ、マルコ Marco Polo(1254-1324) 313
プラモート、ククリット Khukrit Pramot(Kukrit

今井正 Imai Tadashi (1912-1991) 712
 稲盛和夫 Inamori Kazuo (1932-) 111
 猪子寿之 Inoko Toshiyuki (1977-) 51
 犬養毅 Inukai Tsuyoshi (1855-1932) 560
 入江早耶 Irie Saya (1983-) 789-791
 井沢修二 Isawa Shūji (1851-1917) 684
 イハスキー、アヤズ Ayaz Ishaki (1878-1954)
 561, 562, 564
 石坂洋次郎 Ishizaka Yōjirō (1900-1986) 706,
 708-712, 715, 716, 718, 719, 721, 723, 726, 728,
 729
 イソクラテス Isocrates (436 B.C.-338 B.C.) 607
 板谷波山 Itaya Hazan (1872-1963) 152, 153

J

ジェームス、ロイ／サファ、ハンナン Roy James
 /Hannan Safa (1929-1982) 562-564
 ヨーステン・ファン・ローデンスティン、ヤン
 Jan Joosten van Lodensteyn (1557-1623) 377,
 380, 383, 387

K

蠣崎波響 Kakizaki Hakyō (1764-1826) 750
 鎌田東二 Kamata Tōji (1951-) 787
 上林社一郎 Kanbayashi Sōichirō (1967-) 794
 金子勇 Kaneko Isamu (1970-2013) 18-20, 45,
 47, 814
 カント、イマヌエル Immanuel Kant (1724-
 1804) 324, 602
 笠原健治 Kasahara Kenji (1975-) 51
 加藤唐九郎 Katō Tōkurō (1897-1985) 147-166
 川上量生 Kawakami Nobuo (1968-) 54, 56, 62,
 108, 109, 111-116
 河崎義祐 Kawasaki Yoshisuke (1936-) 723
 吉川英史 Kikkawa Eishi (1909-2006) 684, 694,
 699
 菊池大麓 Kikuchi Dairōku (1855-1917) 587
 喜多村信節 Kitamura Nobuyo (1783-1856) 180
 北大路魯山人 Kitaōji Rosanjin (1883-1959) 157
 小寺玉晁 Kodera Gyokuchō (1800-1878) 176
 小泉純一郎 Koizumi Jun'ichirō (1942-) 92, 93,
 95
 高宗 Ko-jong (1852-1919) 549

近藤淳也 Kondō Junya (1975-) 51
 近藤高弘 Kondō Takahiro (1958-) 791,
 795-797, 799-801, 804
 高力猿猴庵 Kōriki Enkōan (1756-1831) 176
 小山富士夫 Koyama Fujio (1900-1975) 156,
 160, 164
 クリステヴァ、ジュリア Julia Kristeva (1941-)
 622, 624, 625, 627-629, 631, 637, 647
 工藤哲巳 Kudō Tetsumi (1935-1990) 196-206,
 208, 209, 211-221
 九条頼経 Kujō Yoritune (1218-1256) 398
 空海 Kūkai (774-835) 594
 国木田独歩 Kunikida Doppo (1871-1908) 595
 クルバンガリー、ムハンマド・アブデュルハイ
 Mehmet Abdülhay Kurbanali (1889-1972)
 557, 559-562, 564
 黒岩大 Kuroiwa Dai (1868-1920) 587
 黒澤明 Kurosawa Akira (1910-1998) 437
 久志卓真 Kushi Takuma (1898-?) 159, 165

L

レ・フォー Lê Phô (1907-2001) 467, 469,
 471-475
 レヴィーン、シェリー Sherrie Levine (1947-)
 228, 229
 レヴィ＝ストロース Claude Lévi-Strauss
 (1908-2009) 297
 李旦 Lǐ Dàn /Ri Tan (?-1625) 425-427
 李華弼 Li Huayī (1948-) 261
 梁啓超 Liáng Qǐchāo (1873-1929) 601
 リバニオス Libanios (314-393) 355-357
 リニエール＝カスー、マルティヌ Martine
 Lignières-Cassou (1952-) 510
 魯迅 Lǔ Xùn (1881-1936) 601

M

馬建忠 Mǎ Jiànzhōng (1845-1900) 601
 前田正名 Maeda Masana (1850-1921) 756
 マイ・チュン・トゥ Mai Trung Thú (1906-1980)
 467, 469, 471-475
 マラルメ、ステファヌ Stéphane Mallarmé
 (1842-1898) 647
 丸谷和史 Maruya Kazushi (1975-) 792

(1451-1506) 311
ル・コルビュジエ Le Corbusier(1889-1965)
487, 492-501

D

ダ・ガマ、バスコ Vasco da Gama(1460-1524)
311
ダムロッシュ、デイヴィッド David Damrosch
(1953-) 764, 770
ドゥルーズ、ジル Gilles Deleuze(1925-1995)
620, 624, 625, 640
デリダ、ジャック Jacques Derrida(1930-2004)
vii, 210
デューイ、ジョン John Dewey(1859-1952) 602
道安 Dōan 399
デュシャン、マルセル Marcel Duchamp
(1887-1968) 259
デュピュイ、クリスチャン Christian Dupuy
(1950-) 516
デュラン、ロドルフ Rodolphe Durand 296

E

エリオット、T. S. Thomas Stearns Eliot
(1888-1965) 626, 632, 638, 639, 641

F

ファルクヴィング、リック Rick Falkvinge
(1972-) 99
範文蘭 Fàn Wénlán(1893-1969) 600
フィッセル、ファン・オーフルメール J. F. Van
Overmeer Fisscher(1800-1848) 182-187
フーコー、ミシェル Michel Foucault(1926-1984)
487, 640
フランクリン、ジョン John Franklin Genung
(1850-1919) 605
フロイト、ジークムント Sigmund Freud
(1856-1939) 739, 741
フロイス、ルイス Luis Fróis(1532-1597) 418,
419, 423, 424
フロム、エーリヒ Erich Seligmann Fromm(1900-
1980) 739
藤田嗣治 Foudjita Tsuguharu/Léonard Foujita
(1886-1968) 283-294

二葉亭四迷 Futabatei Shimei(1864-1909) 595

G

ゴーガン、ポール Paul Gauguin(1848-1903)
310
玄葉光一郎 Genba Kōichirō(1964-) 102-104
ジェンティーリ Alberico Gentili(1552-1608)
335, 344
ゲレデ、ヒュスレブ Hüsvrev Gere(1884-1962)
554, 555
グレオン男爵 Baron Delort de Gleon(1843-1899)
546
グルドン、アンリ Henri Gourdon(1876-1943)
457
グロティウス、フーゴー Hugo de Groot /Hugo
Grotius(1583-1645) 6, 9, 314, 334-357, 365

H

ハディド、ザハ Zaha Hadid(1950-2016) 488,
489
浜松歌国 Hamamatsu Utakuni(1776-1827) 175
長谷川左兵衛 Hasegawa Sahyōe(1567-1617)
378, 380
アンリ4世 Henri IV(1572-1610) 510
ヘリゲル、オイゲン Eugen Herrigel(1884-1955)
138, 139
平賀源内 Hiraga Gennai(1728-1780) 174, 175
北条時房 Hōjō Tokifusa(1175-1240) 398
北条泰時 Hōjō Yasutoki(1183-1242) 398
本多正純 Honda Masazumi(1565-1637) 368,
376, 378, 381, 383
本多静六 Honda Seiroku(1866-1952) 111
洪磊 Hóng Lěi(1960-) 261
堀江貴文 Horie Takafumi(1972-) 52, 59-61,
111, 813
胡適 Hú Shì(1891-1962) 601
黄永砅 Huáng Yǒng Píng(1954-) 267

I

イブラヒム、アブデュルレシト Abdürreşit
Ibrahim(1857-1944) 560
市川崑 Ichikawa Kon(1915-2008) 721
五十嵐力 Igarashi Chikara(1874-1947) 594

人名索引

論文・コラム本文に記載の人名のうち、執筆者による指定のあったものを中心に配列した。注、表の人名は紙幅の都合で割愛した。中国・韓国を含め、外国人名には、原稿のアルファベット表記を可能な範囲で付した。生没年については、探索が及ばなかった場合は空白とした。

A

- アダムス、ウィリアム William Adams(1564-1620) 371, 383, 384, 387
艾未未 Ài Wèiwèi(1957-) 247
赤瀬川原平 Akasegawa Genpei(1937-2014) 237, 263
アレクサンダー大王 Alexander the Great(356 B.C.-323 B.C.) 607
アキナス、トマス Thomas Aquinas(1225?-1274) 345, 356
荒川豊蔵 Arakawa Toyozō(1894-1985) 157, 165
アリストテレス Aristotle(384 B.C.-322 B.C.) 346, 347, 584, 588
アタチュルク、ケマル Kemal Atatürk(1881-1938) 555
アウグスティヌス Aurelius Augustinus(354-430) 336, 340, 351
阿波研造 Awa Kenzō(1880-1939) 138

B

- ベイン、アレクサンダー Alexander Bain(1818-1903) 588
バラゲー、ヴィクトール Victor Balaguer(1824-1901) 277
バードン、ジェフリー Geoffrey Robert Bardon(1940-2003) 757
バレージュ、ブリジット Brigitte Barèges(1953-) 510
バーナム、フィニアス・テイラー Phineas Tabor Barnum(1810-1891) 188-191
バルト、ロラン Roland Barthes(1915-1980) x
バタイユ、ジョルジュ Georges Bataille(1897-1962) 321

- ボードリヤール、ジャン Jean Baudrillard(1929-2007) 207, 227, 242
バイヤール、ピエール Pierre Bayard(1954-) 625-627, 637, 639
ベルティング、ハンス Hans Belting(1935-) 206, 208
ベンヤミン、ヴァルター Walter Benjamin(1892-1940) 124, 125, 127, 500
ベルクソン、アンリ Henri Bergson(1859-1941) 624, 625, 627, 636-638
バーバ、ホミ Homi K. Bhabha(1949-) xi, 500, 707
ブレア、ヒュー Hugh Blair(1718-1800) 590
ブロンホフ、ヤン・コック Jan Cock Blomhoff(1779-1853) 183-185
バロウズ、ウィリアム・S William Seward Burroughs(1914-1997) 231, 239

C

- 蔡國強 Cài Guó-Qiáng(1957-) 247
カロン、フランソワ François Caron(1600-1673) 325
シャバル・デュシユルジュ、ピエール Pierre Chabal-Dussurgey(1819-1902) 461, 462, 464
チェンバース兄弟 William Chambers /Robert Chambers(1800-1883/1802-1871) 587
陳独秀 Chén Dúxiù(1879-1942) 600
陳望道 Chén Wàngdào(1891-1977) 601, 605
千葉泰樹 Chiba Yasuki(1910-1985) 717
キケロー Marcus Tullius Cicero(106 B.C.-43 B.C.) 334, 340, 342, 608
クラーク、ジョン・スコット John Scott Clark(1854-1911) 605
クローデル、ポール Paul Claudel(1868-1955) x
コロン、クリストーヴァル Christóbal Colón

三原 芳秋 MIHARA Yoshiaki

1974年生。コーネル大学 Ph.D.(英文学：2013)。一橋大学大学院言語社会研究科准教授。

Reading T. S. Eliot Reading Spinoza (Ph.D. dissertation (Cornell University), 2013), 「Metoikosたちの帝国——T. S. エリオット、西田幾多郎、崔載瑞」(『社会科学』40巻4号, 2011年), 「崔載瑞のOrder」(『サ・イ・間 S A I』4号, 2008年)。

申 昌浩 SIN Chang Ho

1967年生。総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻修了(2000)。学術博士。京都精華大学人文学部人文学研究科教授。

「房(バン)文化の系譜」(『都市歴史博覧』笠間書院, 2011年), 「整形美人と新儒教精神」(『性欲の研究』平凡社, 2013年), 「宮城道雄の庶民的ナショナリズム」(『大衆文化とナショナリズム』森話社, 2016年)。

千葉 慶 CHIBA Kei

1976年生。千葉大学大学院博士後期課程修了(日本近代美術史：2004)。文学博士。千葉大学・明治大学・和光大学ほか非常勤講師。

『アマテラスと天皇——(政治シンボル)の近代史』(吉川弘文館, 2011年), 『ひとはなぜ乳房を求めるのか——危機の時代のジェンダー表象』(共著：青弓社, 2011年), 『日活1971-1988』(編著：ワイズ出版, 2017年)。

大橋 良介 OHASHI Ryosuke

1944年生。ミュンヘン大学博士課程(哲学)。日独文化研究所所長。

Die "Phänomenologie des Geistes" als Sinneslehre, (Alber 社, 2009年), *Schnittpunkte I, II*, (Traugott社, 2013年), *Kire. Das Schöne in Japan. 2. Auflage*, (Fink社, 2014年)。

中村 和恵 NAKAMURA Kazue

1966年生。東京大学大学院総合文化研究科比較文学比較文化専攻博士課程中退(1993)。明治大学学芸学部教授・同大学院教養デザイン研究科教授。

『日本語に生まれて』(岩波書店, 2013年), 『地上の飯』(平凡社, 2012年), 『世界中のアフリカへ行く——「旅する文化」のガイドブック』(共編著：岩波書店, 2009年)。

鶴戸 聡 Udo Satoshi

1981年生。東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士後期課程修了。博士(学術)。鹿児島大学法文教育学域法文学系准教授。

「ラビニア・ムルーエとレバノンの舞台芸術」(『シリア・レバノンを知るための64章』明石書店, 2013年), 「小さな文学にとって〈世界文学〉は必要か?」(『文学』第17巻第5号, 岩波書店, 2016年), « Présence maghrébine au Japon: Contextes historiques de traduction et d'interprétation », *Expressions maghrébines*, 15-1, Tulane University, New Orleans, 2016, été, pp. 187-197.

大西 宏志 ONISHI Hiroshi

1965年生。京都芸術短期大学専攻映像コース卒業。準学士(映像：1987)。京都造形芸術大学教授、国際アニメーションフィルム協会日本支部理事、モノ学・感覚価値研究会アート分科会幹事。

「アニメーションを作るワザ・教えるワザ」(『モノ学の冒険』創元社, 2009年), 『物気色』(共著：美学出版, 2010年)。

二村 淳子 NIMURA Junko

1970年生。東京大学大学院総合文化研究科比較文学比較文化博士課程満期退学。鹿児島大学講師。
『クスクスの謎』(平凡社新書, 2013), 「ファム・クインと岡倉覚三の「ルネサンス」: 東アジアにおける「古典」の創出と近代化」(『比較文学』, 日本比較文学学会, 2013年), 「パリ仏越派のアオザイ美人像: 20世紀ベトナム絵画への一考察」(『超域文化科学紀要』, 東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻, 2012年)。

ヘレナ・チャブコヴァー Helena ČAPKOVA

1981年生。ロンドン芸術大学TrAIn研究センター修了。博士(文学)。早稲田大学国際教養学部助教。
“Transnational Networkers - Iwao and Michiko Yamawaki and the Formation of Japanese Modernist Design” (*Oxford Journal of Design History*, Vol. 27 No. 4, 2014), 「《のんびり貝》——チェコスロヴァキア及び日本のシュルレアリスム美術の越境的探索」(『立教大学比較文明学専攻紀要』, 2014年), *Bedřich Feuerstein - Cesta do nejnávratnější země světa (Architect Bedřich Feuerstein - A Journey to Japan)* (Aula and KANT publishers, 2014).

江口 久美 EGUCHI Kumi

1983年生。東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻博士課程修了(2011)。九州大学持続可能な社会のための決断科学センター助教。
『パリの歴史的建造物保全』(中央公論美術出版, 2015年)。 *Vocabulaire de la spatialité japonaise* (日本の生活空間) (共著: CNRS Edition, 2014年), 『震災とヒューマニズム』(共著: 明石書店, 2013年)。

山崎佳代子 YAMASAKI Kayoko

1956年生。ペオグラード大学文学部博士号取得(日本文学・比較文学: 2003)。国際日本文化研究センター外国人研究員, ペオグラード大学文学部教授。
『ペオグラード日誌』(書肆山田, 2014年), 『日本語が文学と出会うとき』(編著: ペオグラード大学文学部, 2015年), 詩集『みをはやみ』(書肆山田, 2010年)。

李 建志 LEE Kenji

1969年生。東京大学大学院総合文化研究科比較文学比較文化専攻博士課程満期退学(2000)。関西学院大学社会学部教授。
『朝鮮近代文学とナショナリズム——「抵抗のナショナリズム」批判』(作品社, 2007年), 『日韓ナショナリズムの解体——「複数のアイデンティティ」を生きる思想』(筑摩書房, 2008年), 『松田優作と七人の作家たち——「探偵物語」のミステリ』(弦書房, 2011年)。

今泉 宜子 IMAIZUMI Yoshiko

1970年生。ロンドン大学SOAS博士課程修了。博士(学術)。明治神宮国際神道文化研究所主任研究員。
『明治神宮——「伝統」を創った大プロジェクト』(新潮社, 2013年), *Sacred Space in the Modern City: The Fractured Pasts of Meiji Shrine, 1912-1958* (Brill, 2013), 『明治神宮以前・以後——近代神社をめぐる環境形成の構造転換』(共編著: 鹿島出版会, 2015年)。

春藤 献一 SHUNTO Ken'ichi

1989年生。総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻博士後期課程在学中。

テレングト・アイトル TELENGUT Aitor

1956年生。東京大学大学院博士課程修了。東京大学博士号取得(1998)。北海学園大学教授。
『三島文学の原型——始原・根茎隠喩・構造』(日本図書センター, 2002年), 『詩的狂気の想像力と海の系譜——西洋から東洋へ、その伝播、受容と変容』(現代図書, 2016年), 「概念としての文学——起源における東西詩学の伝統の相違をめぐって」(『年報 新人文』第6号, 北海学園大学大学院文学研究科, 2009年)。

小川 さやか OGAWA Sayaka

1978年生。京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科指導認定退学(2007)。博士(地域研究)。立命館大学大学院先端総合学術研究科・准教授。

『都市を生きぬくための狡知——タンザニアの零細商人マチングの民族誌』(世界思想社, 2011年), 『「その日暮らし」の人類学——もう一つの資本主義経済』(光文社新書, 2016年)。

山内 進 YAMAUCHI Susumu

1949年生。一橋大学大学院法学研究科博士課程単位取得退学(1977)。法学博士(一橋大学)。一橋大学名誉教授。

『掠奪の法観念史——中・近世ヨーロッパの人・戦争・法』(東京大学出版会, 1993年), 『北の十字軍——「ヨーロッパ」の北方拡大』(講談社学術文庫, 2011年), 『文明は暴力を超えられるか』(筑摩書房, 2012年)。

フレデリック・クレインス Frederik CRYNS

1970年生。京都大学人間・環境学研究科博士課程修了(2003)。人間・環境学博士(京都大学)。国際日本文化研究センター研究部准教授。

『日蘭関係史をよみとく——(下巻)運ばれる情報と物』(編著, 臨川書店, 2015年), 『十七世紀のオランダ人が見た日本』(臨川書店, 2010年), 『江戸時代における機械論的身体観の受容』(臨川書店, 2006年)。

榎本 渉 ENOMOTO Wataru

1974年生。東京大学大学院人文社会系研究科単位修得退学(2003)。博士(文学:2006)。国際日本文化研究センター准教授。

『東アジア海域と日中交流——九～一四世紀』(吉川弘文館, 2007年), 『僧侶と海商たちの東シナ海』(講談社選書メチエ, 2010年), 『南宋・元代日中渡航僧伝記集成 附 江戸時代における僧伝集積過程の研究』(勉誠出版, 2013年)。

滝澤 修身 TAKIZAWA Osami

マドリード大学大学院博士課程修了(2000)。同大学歴史学博士。長崎純心大学教授。

『16世紀・17世紀における日本におけるイエズス会士の歴史』(アルカラ・デ・エナレス大学出版局, 2010年), 『日本人使節団ローマへの旅(1582-1590)』(『スペイン王立歴史学学士院紀要』, 2009年), 『日本人の宗教観—ルイス・フロイスの書物を通じて—』(『スペイン王立歴史学学士院紀要』, 2010年)。

平松 秀樹 HIRAMATSU Hideki

1968年生。チューラーロンコーン大学大学院比較文学科修士課程修了(2001)、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学:2006)。大阪大学・チューラーロンコーン大学非常勤講師。

『東南アジアの日本文学』(日本比較文学会編『越境する言の葉——世界と出会う日本文学』日本比較文学学会創立六十周年記念論文集, 彩流社, 2011年), 『日本におけるタイ表象／タイにおける日本表象——異文化受容の前提となる相互認識を目指して』(『比較日本文化研究』第16号, 2013年), 『タイ文学にみる女性の「解放」——『ワンラーの愛』を中心として』(『交錯する知——衣装・信仰・女性』思文閣出版, 2014年)。

劉 建輝 Liu Jianhui

1961年生。神戸大学大学院博士課程修了(1990)。国際日本文化研究センター教授。

『増補 魔都上海——日本知識人の「近代」体験』(ちくま学芸文庫, 2010年), 『日中二百年——支え合う近代』(武田ランダムハウスジャパン, 2012年)。

藤原貞朗 FUJIHARA Sadao

1967年生。大阪大学大学院博士課程退学。修士(文学)。茨城大学人文学部教授。五浦美術文化研究所・所長(併任)。

『オリエンタリストの憂鬱——植民地主義時代のアンコール遺跡の考古学とフランスの東洋学者』(めこん, 2008年), 『山下清と昭和の美術——「裸の大將」の神話を超えて』(共著:名古屋大学出版会, 2014年)。

山中由里子 YAMANAKA Yuriko

1966年生。東京大学総合文化研究科比較文学比較文化専攻博士課程中退(1993)。学術博士(2007)。国立民族学博物館准教授。総合研究大学院大学准教授(併任)。

『〈驚異〉の文化史——中東とヨーロッパを中心に』(編著:名古屋大学出版会, 2015年), 『アレクサンドロス変相——古代から中世イスラームへ』(名古屋大学出版会, 2009年), Yuriko Yamanaka, Tetsuo Nishio (eds.), *Arabian Nights and Orientalism: Perspectives from the East and West*, I.B. Tauris, 2006.

近藤貴子 KONDO Takako

1968年生。東京芸術大学大学院美術研究科修士課程ビジュアルデザイン専攻修了(1995)。アムステルダム大学人文学部大学院修士課程芸術学修了(2007)。ライデン大学人文学部大学院博士課程在籍中。

"Whither 'Japanese Art?'" *Aziatische Kunst* 32 (2002) 2: 14-31. "Six Considerations regarding Exhibitions." *INTERSCAPE*. Amsterdam: Sandberg Institute, 2004: A1496-Ü1567, 「世界美術史形成を背景とする『日本現代美術』の在処——日英二言語領域の美術批評の比較研究」(『鹿島美術研究』年報第33号別冊, 公益財団法人鹿島美術財団, 2016年)。

平芳幸浩 HIRAYOSHI Yukihiko

1967年生。京都大学大学院博士課程単位取得退学(1999)。博士(文学)。京都工芸繊維大学准教授。

『マルセル・デュシャンとアメリカ——戦後アメリカ美術の進展とデュシャン受容の変遷』(ナカニシヤ出版, 2016年), 「東野芳明のデュシャン／中原佑介のデュシャン」(『美術史』第180号, 美術史学会, 2016年), 「瀧口修造の1930年代——シュルレアリスムと日本」(『美学』第243号, 美学会, 2013年)。

呉孟晋 KURE Motoyuki

1976年生。東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士課程単位取得退学(2009)。博士(学術)。京都国立博物館学芸部主任研究員。

「民国期中国におけるシュルレアリスムの夢と現実: 中華独立美術協会の「超現実主義」について」(『現代中国』第83号, 日本現代中国学会, 2009年), 『中国近代絵画と日本』展図録(共著:京都国立博物館, 2012年), 「中華民国期の絵画における「風俗」へのまなざし」(『風俗絵画の文化学3』思文閣出版, 2014年)。

リカル・ブル Ricard BRU TURULL

1981年生。バルセロナ大学博士。バルセロナ自治大学美術史学科客員教授。

Ricard Bru, *Erotic Japonisme. The Influence of Japanese Sexual Imagery on Western Art* (Amsterdam: Hotei Publishing, 2013), Ricard Bru (ed.), *Japonisme. La fascinació per l'art japonès* (Barcelona: La Caixa Foundation, 2013), Ricard Bru et al (eds.), *Secret Images. Picasso and the Japanese Erotic Prints* (London: Thames & Hudson, 2010).

林洋子 HAYASHI Yoko

1965年生。パリ第一大学博士課程修了(2006)。博士(美術史)。文化庁芸術文化調査官, 国際日本文化研究センター客員准教授。

『藤田嗣治 作品をひらく』(名古屋大学出版会, 2008年), 『藤田嗣治画集』全三巻(監修:小学館, 2014年), 『藤田嗣治 妻とみへの手紙 1913-1916』上下巻(監修:人文書院, 2016年)。

執筆者紹介(収録順, *は編者)

*稲賀 繁美 INAGA Shigemi

1957年生。東京大学大学院博士単位取得退学(1988)。パリ第七大学新課程統一博士号取得(1988)。国際日本文化研究センター教授・副所長、総合研究大学院大学教授(併任)。
『絵画の臨界』(名古屋大学出版会, 2013年)、『接触造形論』(名古屋大学出版会, 2016年)、『伝統工藝再考: 京のうちそと』(編著: 思文閣出版, 2007年)。

多田 伊織 TADA Iori

1960年生。総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本文化専攻博士課程修了。博士(学術)。
大阪府立大学客員研究員・京都大学人文科学研究所共同研究員、皇學館大学・鈴鹿医療科学大学講師。
『日本霊異記と仏教東漸』(法藏館, 2001年)、『小島寶素堂関係資料集』(共編著: 京都大学人文科学研究所附属東アジア人情報学研究中心, 2012年)、『古代日本と中国の文字と書記メディア』(『日本古代の地域と交流』臨川書店, 2016年)。

鈴木 洋仁 SUZUKI Hirohito

1980年生。東京大学大学院学際情報学府博士課程単位取得退学(2016)。博士(社会情報学: 2017)。東京大学総合教育研究中心センター特任助教。
『平成論』(青弓社, 2014年)、『映像文化の社会学』(共著: 有斐閣, 2016年)、『21世紀の若者論』(共著: 世界思想社, 2017年)。

片岡 真伊 KATAOKA Mai

1987年生。ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン比較文学専攻修士課程修了(2011)。総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻博士後期課程在学中。
『Emending a Translation into “Scrupulous” Translation: A Comparison of Edward G. Seidensticker’s Two English Renditions of “The Izu Dancer”』(『文化科学研究』第12号, 総合研究大学院大学文化科学研究科編, 2016年)。

山田 奨治 YAMADA Shoji

1963年生。筑波大学大学院修士課程医科学研究科修了(1988)。国際日本文化研究センター教授。
『〈海賊版〉の思想: 18世紀英国の永久コピーライト闘争』(みすず書房, 2008年)、『日本の著作権はなぜこんなに厳しいのか』(人文書院, 2011年)、『日本の著作権はなぜもっと厳しくなるのか』(人文書院, 2016年)。

新井 菜穂子 ARAI Nahoko

1961年生。山形大学大学院理工学研究科博士課程修了(2002)。博士(工学)。北京工業大学外籍教師。
『日本人の空気観——電気・空気・雰囲気という漢語をめぐって——』(『心身/身心』と環境の哲学——東アジアの伝統思想を媒介に考える』汲古書院, 2016年)、『「妙真問答」の書誌について』(『妙真問答を読む——ハビアン(ハビアン)の仏教批判』法藏館, 2014年)、『近代黎明期の通信——日本語「電信」「電話」の変遷をめぐって』(『日本研究』第35集, 国際日本文化研究センター, 2007年)。

森 洋久 MORI Hirohisa

1968年生。東京大学大学院理学系研究科情報科学専攻博士課程退学。国際日本文化研究センター文化資料研究企画室准教授。
『角倉一族とその時代』(編著: 思文閣出版, 2015年)、『増補改訂 森幸安の描いた地図』(共編著: 臨川書店, 2016年)。